

森田正馬・時枝誠記・小林秀雄における生氣論的世界観

大嶋 仁 (National Institute of Oriental Languages and Civilizations)

OSHIMA Hitoshi

私がここで生氣論的世界観と呼ぶものを、アニミズム的世界観と呼んでもさしつかえない。人によってはアニミズムと生氣論(ヴァイタリズム)を区別するようであるが、ここでは同義語であると解していただきたい。すべての事象を生きたもの、動くものとして捉える世界観のことである。

森田正馬(1874-1938)は、日本の精神医学史のなかで特別な地位を保ってきた。彼が発明したいわゆる「森田療法」は、伝統的な考え方に立脚した心理療法として知られ、それによって、彼は日本の生んだ独創的な心理学者あるいは精神医学者に数えられている。森田の理論的貢献も評価されている。ことに、その「神経質」理論は独自の神経症論として価値があるという。また、この理論の背景には、日本の伝統的な世界観が視かれるとも言われる。それゆえ、精神医学や心理学に無縁の者も、森田の思想には関心を抱くのである。

私がここに明らかにしたいと思うものは、もっぱら森田の思想である。彼の精神医学ないしは心理学理論の背景にある世界観である。

森田の世界観は、のちに見るように、同じ昭和の前期に他の分野で活躍した何人かの日本人にも共通して見出されるものである。この共通性は決して偶然ではなく、一定の歴史的状況を反映していると考えられる。私は、そうした例として、近代国語学において独創的な理論を打ち立てた時枝誠記(1900-1967)、それから近代文芸批評の確立者と言われる小林秀雄(1902-1983)を挙げることにした。これら三者の世界観における共通点を明らかにすることで、近代日本思想史の一面を示したい。

森田の理論的著作のなかで最も重要なものは、恐らく『神経質の本態と療法』(1927)である。この著作には彼の基本的な心理学的見解と、それに基づく心理療法とが説かれている。我々は、それらを通じて、精神そのものについての彼独自の見方と、それを支える彼の世界観といったものを読み取ることが出来る。

この著作の一つの特徴として、森田が自らの心理学的見解を述べるに際し、しばしばフロイトやデュボアら西欧の心理学者を批判していることが挙げられる。森田の西欧心理学批判は、彼の理解する西欧心理学がどういうものであったかを示すばかりでなく、それに対する彼自身の立場がどういうものであったかをも鮮明に示している。

森田がフロイトを真っ向から批判したという事実は、それ自体、一考に値する。というのも、一つの説を立てるには既存の諸説を批判するのが当たり前のようにも思われるが、日本では必ずしもそうではないからである。日本においては、既存の有力な諸説との融和あるいは折衷をはかるといった場合も、近代以前以降を問わず多々ある。森田の西欧心理学批判は、その意味で、一つの特徴的な理論構築の手段と見ることが出来、それは後に見るように、時枝のソシール言語学

批判や小林のマルクス主義文学理論批判とも通じるものなのである。

では、森田のフロイト批判を『神経質の本態と療法』から拾ってみよう。

まず彼は、フロイトの精神分析は「精神的外傷」ということで神経症を説明するが、このような「外傷」があるからといってどんな人でも神経症を病むとは限らないから、フロイトの説は不十分だという。一定の人しか神経症にならないその理由を、フロイトは十分に説明していないというのである (p.24, p.61)。

森田のフロイトに対するもう一つの批判は、もっと根本的である。森田はフロイトの精神現象を扱う態度そのものが気に入らないとし、こう言う。「フロイトなどが潜在意識を異物化し、人格的となし、固定したもののよう考えるのは、私の大へん好まないところである」(p.34)。すなわち、精神現象を扱うに当たって、一定の独立した実体を考え、しかもその実体を、まるで意志のある生きものであるかのように扱うその発想を批判しているのである。

森田は、このようなフロイトの考え方を「目的論的」(p.41, p.143)といい、従って「科学的」でないという。森田にとっての「科学」とは、精神現象を一つの自然現象として「如実に観察記述」することであるので、一切の「目的論的な説明」は非科学的と映るのである。

フロイト理論を「目的論」と断定した森田は、また同じ理論を「機械的、数学的」であるとも言っている (p.61, p.63)。「機械的、数学的」であることは、「それだけの興味と必要はある」から一概に批判は出来ないが、しかし個々の症状の特殊条件や事情を看過する危険があり、よって治療上の効果はないだろうというのである。

フロイトの性欲説についても、森田は批判的である。神経症が「性欲の抑圧規制」から起こるというフロイト説は、森田にとっては「こじつけ」であり、神経症の原因は「性欲に限ったことではない」と彼は考える。この点では、森田も多くのフロイト批判者の意見と異ならないが、注目すべきは、彼がそれに加えて「性欲に対する抑圧または拮抗作用はすべての人間の常にある自然現象である」(P.88)と言っている点である。森田に言わせれば、「抑圧」が「自然」である以上、それだけでは神経症の原因にはならないのであるから、原因を別のところに求めねばならないのである。

では、エディプス・コンプレックス説についてはどうか。これについて、森田は一概に否定していないが、コンプレックスを追い詰めていけば、究極「気質、すなわち神経質とかヒステリーとかの素質」に行き着くだろうと言っている (p.178)。これを言い換えれば、神経症の発病の原因は、「コンプレックス」そのものよりも「素質」だということになる。なぜなら、「コンプレックス」は「すべての人の日常にありがちのことである」が、「これが病的となる」のはある特殊の人だけだから、というのが森田の理屈である (p.179)。

以上が森田のフロイト批判の骨子であるが、フロイトを批判した以上、今度は森田自らの立場を打ち出さねばならない。そこで特に重要となるのは、フロイトの目的論的な説明を批判する際に開陳する、彼の「精神現象」についての所見である。この所見を述べるくだりにこそ、森田思想の根本が提示され、その世界観も垣間見ることが出来る。

森田曰く、「内界と外界との間に、相関的に絶えず流動変化しているもの、これが精神」である。それなら、「精神」とは「流動する実体」であるかというに、そうでもない。禅の「鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木の間が鳴る」という文句をもじって、彼の立場を「撞木当れば鐘が鳴

る」と言い換えているからである (P.34)。すなわち、彼にとって、「精神」とはあくまで「活動」であり、その「活動」とは二者間の「相関的活動 (interaction)」なのである。

このように、精神現象をその「流動」の相のもとに見て、それを実体化せず、そこに何らの機械論的ないしは目的論的説明を加えまいとする立場こそ、森田正馬の根本思想である。この思想は、その考察の対象を精神現象のみならず現象一般にひろげれば、一つの生氣論的世界観となる。すなわち、世界は流動であり、活動であって、一時も静止しないというものであり、それについて何らかの説明を加えることによって、人は世界の実相に近付けないという見方なのである。

森田理論について、最後に森田のフロイト批判には妥当性があるかどうかということを考えてみたい。これについては詳細な検討が必要であるが、概して言えば妥当性は欠けているのではなからうか。一例を挙げれば、森田は「抑圧」を自然なこととし、それが神経症を生むのは、一定の「素質」に働きかけるからだと言っているが、これは森田が神経症を極めて症候的に見ている証拠であり、フロイトの見方を矮小化していると思われる。フロイトにすれば、「抑圧」によって人間の「自然」が蝕まれるから神経症が生まれるのであって、そのような神経症は「素質」のいかに関わらず、程度の差こそあれ、人類全体に共通して見出されるものなのである。こういう見地に立てばこそ、フロイトは文明批判をもなし得る。森田には、そうしたフロイトの奥行は見えていなかったように思われるのである。

次に、時枝誠記であるが、彼が独創的な日本語文法を編み出したということはよく知られている。その文法理論は「言語過程説」と呼ばれる言語観を基礎にしているが、この言語観こそ私が問題にする世界観を反映している。

時枝の世界観は、森田のそれがフロイト心理学の批判に沿って開示されたのと同様に、ソシュールの言語学の批判に即して展開されている。そこで、時枝のソシュール批判を、その主著『国語学原論』(1941)にまず見、それから、その批判をふまえた彼自身の立場を見ることにしたい。

時枝のソシュール言語学批判は、それ自体として『国語学原論』の一章をなしている(総論、第六章)。それは、主にソシュールその人の学問に向けられているが、それを継承している内外の人々にも向けられている。

まず、時枝がソシュール批判をするその動機であるが、これについては次のように述べている。「泰西の既製品の理論を多量に吸収して、これを嚙下すること」ばかりしてきた国語学は、「学問的精神の根本である処の批評的精神に生き、飽くまで批判的態度を以てこれを取捨選択し、……自己の理性に訴えてこれを受け入れねばならぬ」(P.59)というのである。時枝国語学がいかに自覚的な方法に基づくものであったか、この言葉によく表れている。

時枝によれば、ソシュールの欠点の一は、具体的な言語現象から離れ、「言語 (langue)」という抽象的・観念的な単位を立てた点にある。この発想は、科学の出発点は単位の認識にあるという「自然科学的原子的構成主義」に基づくものであるが、時枝によれば、言語は自然科学の対象とはなり得ないのだから、この発想は根本的な誤りなのである。また、ソシュールによれば、聴覚映像と概念の連合した「もの」が言語であるが、時枝に言わせれば、我々が具体的に経験し得るのは聴覚映像が概念と連合する「こと」にほかならず、連合した「もの」ではない。ソシュールは「こと」のレヴェルの現実に止まらずに、それを無視して「もの」の存在のレヴェルへと飛

躍したからいけないのだ、と時枝は非難するのである (P.64)。

時枝によれば、ソシユールのように「こと」から「もの」へと思考の対象が移ってしまうのは、言語主体を離れて言語を考えるからである。音声と概念が「連結する」といい、「相呼応する」というその作用は、人間精神という主体なくしてあり得ない。それなのに「主体」を離れて言語を考えるために、それを「もの」のように扱ってしまうのである。時枝のソシユール批判は多岐にわたっているが、「自然言語」についての批判も挙げておきたい。時枝は、近代言語学は、あたかも「自然言語 (la langue naturelle)」が存在するかのような考えを生んだという (p.109)。しかし、そうになると、現実にあるがままの言語についての考察は疎かになり、また言語における価値や技術の問題も二次的なものとされるだろう。しかも、「自然言語」は文字以前の言語と考えられるから、どうしても文語は口語より軽視される。こういう傾向を、時枝は近代言語学の悪しき傾向として非難したのである。

こういう非難の裏には、文語は「自然言語」からの歪みではなく、それは口語とは異なった価値と技術から成る別の言語だ、という考えがある。口語とは別の表現技術として、文語独自の価値を時枝は認めているのである。真の言語とか偽の言語とか、自然であるとかないとか詮索すべきでないとか彼はいう。この主張は、一面でジャック・デリダが行なった「音声中心主義 (phonocentrisme)」批判を思わせる。

さて、今度は時枝自身の言語観について見てみよう。

まず、ソシユールの「もの」としての言語観に対し、彼は「こと」としての言語観をたてる。「言語は語ったり、読んだりする活動それ自体である」というのである (p.12)。ソシユールは「意味」をもった「音声」を「言語」だというのが、そんなものは時枝によれば実際に観察出来ない。音声の意味をもっていると考えるのは、主体的な作用である「言語」というものを客体的に投影しているのだと彼は見るのである。

「こと」としての言語ということは、言い換えれば「行為」としての言語ということであり、それはあくまでも言語を行為主体の立場から見方による。対象を如実に把握しようとすれば言語経験は「語る」「聞く」「読む」「書く」という「こと」以外になく、そういう活動の主体ぬきに言語の存在を考えることは不可能だ、と彼は強調するのである (p.23)。時枝の立場は、行為主義の立場、主体主義の立場であると言えよう。

「言語」を「もの」と見なす立場は、「言語」を原子のような要素によって構成されたものと考えている。ソシユールの場合、「言語」を聴覚映像と概念という二要素に分けるのである。ところが、時枝はこのような「構成主義」をとらないため、聴覚映像とか概念と言うかわりに「音声発表行為」とか「概念化作用」と言う。「こと」としての言語という見方は徹底しているのである。

この立場を表現主義の立場だということも出来る。というのも、時枝は何度も「表現」という言葉を使い、「言語活動」は「表現活動」の一つだとしているからである。勿論、「言語活動」には「聞く」「分かる」といった了解の部分も存するし、それについての言及もないわけではないが、大体の場合において、彼は「表現行為」としての「言語」を問題にしているのである。時枝にとって、表現される「もの」より、表現する「こと」自体の方が大切なのである。

ところで、ソシユールは我々の具体的現実としての「言語活動 (langage)」について、これは混質的であるから研究対象として難しいとし、その代わりに等質的な客体としての「言語

(langue)」を立てているが、これを時枝は「構成主義」とか「原子主義」と呼んで批判している。この批判は、ソシュールの依って立つ哲学的基盤に触れる問題であるから、当然時枝自身の哲学的な立場が問題になる。我々が関心を持つ、彼の世界観がここにおいて現われて来るのである。

すでに時枝が「こと」の立場に立っていることは述べたが、これを時枝自身の用語に即して言えば、「過程説」ということになる。つまり、言語を構成要素から成る実体と見る代わりに、それを動的な、主体的な「過程」と捉えるのである。曰く、「言語は単一単位でないのみならず、飽くまで精神生理的複合単位であり、厳密に言えば、聴覚映像から概念、概念から聴覚映像として連合する継起的な精神生理的過程現象に他ならない」(p.65)。この「過程」として捉える言語観こそ、とりもなおさず時枝の「過程的」世界観を反映しているものであり、それは言い換えれば生氣論的な世界観なのである。

しかし、「過程」として事象を捉えてしまうと、それを分析するのは困難ではないか、という疑問が生じるかも知れない。時枝に言わせれば、「過程」の分析も可能である。というより、言語を「過程」として捉えることは、言語を主体として生きることであり、それがあって後に、それを正しく観察し、分析することも可能なのである。

では、かかる分析から何が生まれるかという、明らかに「音声」とか「概念」のような構成要素ではない。生まれるのは、たとえば「音声発表」とか「概念化」とかの段階的行為なのである。時枝は、この各々の行為を、言語表現過程の「段階」という言葉で呼んだ。彼の「過程的」世界においては、事物のかわりに、次から次へと進んでいく「段階」が存在するのだ。

ところで、言語表現の過程が成立するには一定の状況が必要である。この状況を、時枝は「場面」と呼んで、ことさらに重視した。「場面」には表現行為の相手も含まれる。そして、主体の表現は「場面」に制約されると同時に「場面」を変容させるという弁証法が成り立つ。時枝の言語論は、実はこの「場面」の弁証法において、その頂点に達すると言える。

要するに、時枝の言語思想は主体主義・行為主義・表現主義として現われるが、それは主体の独我論ではなく、「場面」の弁証法に支えられている。そして、その根底には、すべての事象を一つの動的な「過程」と見る一つの世界観が横たわっているのである。

最後に、時枝が森田と同様、学問は「具体的にして如実な観察」から出発しなければならないと強調している点を確認しておこう(p.13)。このような立場は一種の現象学的な立場であるが、現象学は彼に影響を与えたと言えるだろうか。影響という点では、時枝の唱える「場面」の弁証法に西田哲学の「場所」の弁証法の反映を見ることも可能である。しかし、時枝自身は自己の立場を江戸時代の国学派の言語学の継承だとしている。私としては、時枝言語学は伝統的言語観を近代化の過程において鍛え直し、普遍化したものであると考えて満足したい。

なお、時枝のソシュール批判が妥当であるかについては、すでに何人かの専門家が論議していて、時枝のソシュール理解は不十分であったという見解も出ている。私としては専門外であるので、次のことを言いたいと思う。すなわち、ソシュールと時枝とはそれぞれ文化的背景を異にしているので、言語思想にも違いが出てくるのは当然であるが、双方ともそのことを意識せず、自らの立場を「科学的真理」として直接押し出しているところが特徴的だということである。これは、文化的相対主義という考え方が当時は行き渡っていなかったことを物語ろう。

さて、文芸批評家小林秀雄の世界観を抽出するに当たっては、森田、時枝と同様の方法をとるのは難しい。というのも、小林には『神経質の本態と療法』あるいは『国語学原論』といった理論的な大著はないからである。彼に文学理論があるとしても、それは決して理論としての体系をなしてはいず、むしろ短いエッセイのような文章のなかに断片的に現われるに過ぎない。

小林の文章のなかで、彼自身の文学観なり文芸批評観なりをまともに打ち出しているのは、その処女作「様々な意匠」（1929）であろう。たった数頁の小さなエッセイに過ぎないが、この数頁に小林の文学思想のエッセンスが凝縮されていると言える。

このエッセイで、小林はまずマルクス主義の文学理論を攻撃している。当時の日本において最新流行の理論であったマルクス主義を、彼は一つの「意匠」として攻撃するのである。「意匠」とは何か。それは、既に来上がった思想、すなわち思考のプロセスをぬきにした、いわば「もの」となった思想のことである。

このことは、小林が来上がった思想あるいはイデオロギーとしてのマルクス主義を嫌悪していることを意味すると同時に、マルクスという創造的な人間の思索そのものについては、これを肯定的に見ていたということを含み持つ。事実、彼は、マルクスが己れの宿命的な個性に従って、「生き生きした現実」を目のあたりにしながら、「時代の根本性格」を写した人だと評価しているのである。マルクス理論は、生きた現実からマルクスという個性が生み出したものであり、小林にとって、それ故に一定の価値はあるのである。小林のマルクス主義批判は、従って、フロイトやソシュールを直接批判した森田や時枝と同列のものではない。

では、小林がマルクス主義の文学理論を攻撃した理由は何かということ、それはマルクス主義者たちがマルクスの思想の創造には無関心で、その理論を来上がったものとして、そのまま有り難く信奉したからである。彼は言う、「世のマルクス主義文芸批評家……の脳中においてマルクス観念学なるものは、理論に貫かれた実践でもなく、実践に貫かれた理論でもなく……正に商品の一形態となって商品の魔術をふるっている」。つまり、マルクス主義とは「商品」となった思想であり、このような思想の物品化をこそ小林は厳しく難じているのである。

小林が「様々な意匠」で批判しているのは、マルクス主義文学理論ばかりではない。例えば、「写実主義（リアリズム）」「象徴主義」などという文学上の主義も批判の対象となっている。

また、「印象批評」と「客観批評」という批評方法については、「印象」も「客観」も煎じつめれば二つに分けることは出来ないと彼は言っている。その根拠は何かと言えば、「印象批評」といわれるものも、それが優れている場合には、客観的な「批評」であると同時に、批評家の「独白」でもあるからだ。「人は如何にして批評というものと自意識というものとを区別し得よう」と小林は問う。「批評するとは自覚することである……。批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事」だというのである。

この「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事」という有名なテーゼは、決して主観主義のテーゼではないと強調しておこう。後年の小林が批評の極意として「無私精神」ということを言ったのも、同じ事を反対の方向から言ったに過ぎないのである。

文学における「普遍性」という問題についても、小林の立場は断固としている。彼は、「如何なる芸術家」も「普遍性などという怪物」を狙ったことはなく、むしろ「個体を狙った」のだと言うのである。「普遍性」よりも「個体」の立場をとり、その「個体」に徹することによっての

み「普遍性」に到達出来ると彼は考えた。この立場は、文学を創造する者の側の立場であって、いわゆる「批評家」の立場ではないとも言えよう。その意味で、小林の立場は、言語学において表現主体の立場を強調した時枝の立場に似ていると言える。

このような「個体」主義の表現主体の立場からは、無論、美学というものも攻撃されねばならない。彼は、美学には「観念的美学」と「実証的美学」があるが、その両方とも芸術とは関係がないと言い切っている。彼によれば、芸術とはあくまで「実践」行為なのである。

しかし、芸術においていかに創作行為が重要であろうとも、作品もまた重要ではないのか。この問いに対して、小林は作品は芸術家にとって「里程標」に過ぎず、「戦の記念碑」に過ぎないと述べている。言い換えれば、作品とは「死物」であり、作品を論ずる者はこの「死物」からそれを生んだ主体へと逆戻りしなければならないのである。

同じ事を小林は次のようにも言い換えている。芸術家は「常に新しい形を創造しなければならない」が、「重要なのは新しい形ではなく、新しい形を創る過程である」と。

もっとも、作品がなければ、作家の創作過程に我々は到底参与出来ない。作品はむしろ創作過程への入り口、媒介者でなければならない。これについては小林も気づいていて、こう言う。「弱小な人間」にとって、「詩作過程という現実と……作品の効果という現実とは、截然と区別された二つの世界だ」。これを裏返せば、創作過程と作品は実は別のものではなく、一方が原因、他方が結果というものでなく、両者は不可分だということである。すなわち、「創作過程即作品」というのが、「主観即客観」「個体即普遍」と並ぶもう一つの小林のテーゼなのである。

以上、小林の文学理論を「様々なる意匠」に見たが、そこからは「主観即客観」「個体中心主義」とともに「芸術過程説」という考え方が浮かび上がってくる。無論、この過程重視の考え方には、時枝や森田の世界観と共通のものが見える。その共通基盤は、確かに時代の一思潮であったであろう。そこには、多分にベルクソン哲学の影響もあると言えるであろう。しかしまた、古来から日本の思想的伝統の一つになっている生氣論の世界観が近代的な表現を伴って噴出しているとも言えると思う。

このことは、森田・時枝・小林らの時代が、江戸時代の遺産としての漢学の終焉の時代であったということにも関係していよう。「個体」と「主体」の重視、「もの」よりも「こと」への傾斜は、漢学によって押しつぶされていた固有文化の復興ということであったかも知れない。またそれは、西欧文明の受容という時期を終えて、己れの文明の自己主張をする時期に日本も入ったという歴史的状況のしわざかも知れない。大正から昭和の大戦争の始まる頃にかけて、日本文化は一種のルネサンスを迎えていたと言えなくもない。

【出典】

森田正馬『神経質の本態と療法』（白揚社、1960）

時枝誠記『国語学言論』（岩波書店、1968）

小林秀雄『様々なる意匠』（新潮社、小林秀雄全集第一巻、1978）